

土手町リバイバル

荒谷果凜・小山冬彩・久保心晴・齋藤楚々乃・千葉夏帆・中村心咲

1. 土手町の変遷

1960～1970年代の弘前市の土手町通りは、活気とポテンシャルにあふれた津軽地方最大の商店街で、たくさんの店が賑わい、人が行き交っていたが、近年では、経済の情報化や大型商業施設の増加により、商店街の需要が低くなったことにもなって、シャッター街化が進んでいる。2024年には、土手町の象徴であった百貨店「中三弘前店」が突然幕を下ろしたことで、土手町の衰退を加速させる決定打となってしまった。

2. 食品ロス問題と土手町の現状

一方、家庭科の授業で食品ロスの問題について学習した。日本の食品ロスの発生量を調べると、年々減少してきているが、現在でも日本の食品ロスは国連の世界食糧計画（WFP）による食料支援量よりも多いことが分かった。弘前市内の事業系食品ロスも、月に約205トンも出ていることが分かった（2018年度）。そこで、私たちは土手町にある飲食店の食品ロスを減らし、減らした分の費用を広告に使用して、広告を見た人が土手町に来ることで活性化できるのではないかと考えた。

まず、食品ロスの現状を調査するために、土手町通り近隣の5つのカフェ取材した。しかし、食品ロスが多い店はなかった。多くのカフェでは、野菜の不可食部を出汁に有効活用したり、在庫管理したりするなど、すでに食品ロスを減らすための工夫が行われていた。コロナ禍を経てお店を閉めざるをえない状況を経験し、食品ロスに対する意識が高まったことも関係していると考えられる。こうして食品ロスを減らして広告費に捻出することは難しいということが分かった。

3. 土手町活性化の提案（1）～地域の伝統料理の提供～

そこで、別の方法で、土手町に行く理由を作ることによって人を集め、土手町を活性化させることを検討した。県外の事例を調査すると、福井県では若狭高校の生徒がクラウドファンディングで集めた資金を使って子ども食堂でクリスマス会を開いたことが分かった。目標金額は6万円だったが、9万9千円を達成した。この他にも、たくさん的高校生がクラウドファンディングに挑戦していることが分かった。これらの事例を参考にして、私たちも土手町活性化の取り組みを進めていこうと考えた。

まず、土手町のお店の方たちは土手町についてどのようなことを考えているのかを知るために、中土手町に店舗を構えるあべフローリストの社長で、中土手町商店街復興組合の副会長である阿部昌士さんにお話をうかがった。阿部さんは土手町を歩く人が増えると、店に

入る人が増える、また、観光客が土手町を歩くきっかけづくりとして、郷土料理を提供する飲食店があると良いのではないかとおっしゃっていた。

私たちは阿部さんから教えていただいたことを取り入れつつ、私たちが学習した食品ロス問題を関連させたいと思ったので、津軽あかつきの会のみなさんとコラボすることを考えた。津軽あかつきの会は古津軽伝統料理を継承するために結成された会で、世界からも注目されている。私たちは実際に、津軽あかつきの会と弘前高校ホームメイド同好会のみなさんと一緒に、けの汁とがっばらもちを作った。私たちが食べたことがない郷土料理もあり、観光客の方にも地元の方にも、是非、郷土料理を食べてほしい、その魅力を知ってほしいと思った。津軽あかつきの会の方は、会が活動していないときや予約が取れないときでも、気軽に郷土料理が食べられる場があれば嬉しいとおっしゃっていた。

それらを踏まえて、私たちの第1の提案は、津軽あかつきの会のメニューが食べられる店舗を作ることである。とくに朝食に力を入れ、ホテルでは食べられない地域の伝統料理を提供したいと考えている。その目的は、土手町に訪れるきっかけを作る、地域の伝統料理を知ってもらう、観光客にリーズナブルな値段で料理を楽しんでもらう、地元の方にも郷土料理を楽しんでもらうという4点である。

4. 土手町活性化の提案 (2) ～落ち着いて勉強できるカフェ～

私たちの第2の提案は、生徒・学生が落ち着いて勉強できる場所をつくるというものである。勉強がメインで、サブでカフェがある場所をイメージしている。メリットとしては、周りを気にせず勉強に集中できる環境が増えること、デメリットとしては、サブのカフェの売り上げが心配されることが挙げられる。しかし、すでにある店舗の分店とすることで、売り上げの心配を減らすことができるのではないかと考えた。これらのカフェでは、より少ない資金で運営できるようにするために、私たちが調査したカフェで行っているような工夫を実行していきたい。

また、弘前高校の1・2学年の生徒に、土手町に勉強スペースを作るとしたら、どのような設備・環境が良いかというアンケートを実施した。結果は、充電設備があること、ネットで利用状況を確認できること、Free Wi-Fi があることといった条件が上位に挙がった。カフェの有無については、カフェがあった方が良いという声が多かった。こうした条件を満たす店舗を実際に作ることで、多くの生徒・学生が土手町に集まると考えられる。

5. 今後の活動

これまで提案したことを実現させるために、クラウドファンディングを実行したい。そこで、現在、実際にクラウドファンディングをした若狭高校の生徒と連絡を取りながら、実現に向けての課題を検討している。今回の探究ではここまでしか進んでいないが、今後実現に向けて取り組んでいきたいと考えている。私たちの取り組みが土手町に活気が戻るきっかけとなればうれしい。

(荒谷果凜・小山冬彩・久保心晴・齋藤楚々乃・千葉夏帆・中村心咲 弘前高等学校)